故郷の空　No. 21

桜の風景

村上　保
Tamotsu Murakami

桜の花は、それぞれその土地の桜であると思うのだが、三十年以上暮らしている東京で見る桜が、未だに故郷の桜なのは不思議である。もちろん、東京の空の下で見ているのだが、いつも同時に、子どもの頃見た故郷の桜の風景が同時に重なるのだ。しかも、むしろその方がより鮮明に思えるのが不思議なのである。子どもの頃覚えた味覚は、その人の一生を支配するという。つまり、「おふくろの味」と同じで、桜の花と子どもの頃の風景とがワンセットになって、ボクの記憶の中に刷り込まれているのかもしれない。

昨年の十一月からボクは文化庁派遣芸術家としてロンドンに滞在している。ちょうどその期間が一年間なので、ロンドンか、または他の国のどこかで、桜の花を見るかもしれない。はたしてその時、東京で見た桜の時と同じように、ワンセットになっているかどうか。子どもの頃の小さな記憶が、遥か遠い国でも変わらないままよみがえるかどうか。とても楽しみである。

（彫刻家）

むらかみ・たもつ　モダンアート協会会員。一九五〇年、大洲市生まれ。東京都杉並区在住。東京学芸大学卒。モダンアート展（新人賞、部門賞、協会賞）。文化庁現代美術選抜展。新潟市野外彫刻大賞展。KAJIMA彫刻コンクール作品展（銀賞）。個展ほか。山形・蔵王高原、三重県・尾鷲市、東京・神田などに彫刻作品設置。文化庁派遣芸術家として英国・ロンドンに滞在中。